

グローバル化を考える

村 田 治

いま、グローバル人材の育成など、日本の大学のグローバル化が急速に進められています。学生や卒業生が世界へ出て行くことが求められ、これ自体は“Mastery for Service”を体現する世界市民を育成する関西学院にとって推進して行かねばならないことです。

初代院長ランバス先生は中国、アフリカ、ヨーロッパなど世界を股にかけ、教育・医療伝道に従事された、文字通り世界市民でした。関西学院は創立時から、キリスト教主義に基づいた国際色豊かな（グローバルな）学び舎として出発しました。

グローバル化は国際化とは違い、ヒト、モノ、おカネだけでなく、企業組織や金融システムなどの制度までもが国境を越えて自由に移動すること意味します。しかしながら、この一連のグローバル化の根底には世界的な大競争（Mega-competition）があることを忘れてはなりません。

グローバル化の要因は、東西の冷戦の終結による東欧、アジア、中南米諸国の世界市場への組み入れとIT革命による世界市場の統合にあります。いわば、世界が一つのマーケットに統合されたことが大きな要因です。このことによって、商品だけでなく、労働力の供給源としての大学教育も世界的な競争に巻き込まれていったのです。この大競争によって、世界での格差が拡大しており、特に、国と国との格差が大きくなっています。

その意味では、ランバス先生が世界中を伝道された時の状態とほとんど変わっておらず、今こそ、“Mastery for Service”を体現する世界市民が求められていると言えるでしょう。

(学長)

関西学院 歌声のキャンパス

田 淵 結

今年創立125周年を迎える関西学院は、1889（明治22）年に現在の神戸市王子公園のあたりに、ランバス先生に代表される南メソジスト監督教会により関西学院が

創立されました。その学院のキャンパスは、他の一般学校とまったくちがう雰囲気であったことでしょう。キリスト教の主義による教育のなかでチャペルアワー（学校礼拝）は当然のように、学校でも学生寮でも行われていましたから、讃美歌が毎日歌われていました。125年後の今と同じようにどこかで讃美歌の歌声がこだまし、関西学院独自のキャンパスの雰囲気、それは歌声のあふれるキャンパスということなのです。

そして学院創立10年後、ようやく関西学院校歌が発表され、関西学院の歌ができました。カレッジソング“Old Kwansei”が、1900（明治33）年の秋に学院の第五回英語会において初めて「グリークラブ」によって歌われたそうです。歌詞はすべて英語、またこの時が関西学院グリークラブの始まりとも言われています。以後関西学院には讃美歌だけではなく、この校歌、さらにグリークラブによる合唱など、キャンパスにはますます歌声があふれていったことでしょう。

ただこの最初の校歌のことを考えると不思議な感じがします。何よりも創立10年ぐらいいかない学校なのに、なぜ“Old”と歌ったのでしょうか。もちろん10年もたてば懐かしさもそろそろわいてくることと思いますが、それでも「なぜ」と思わされてしまうのです。その一つの理由が、実はこの歌は、関学オリジナルのものではなく、ほとんどの歌詞と曲はアメリカのIVYリーグと呼ばれる名門大学のひとつプリンストン大学のカレッジソング“Old Nassau”の替え歌だったからかもしれません。そのNassauのところをKwanseiと置き換えて自分たちの校歌にした、ということです。プリンストン大学はアメリカ合衆国独立前の1746年に設立された現在アメリカで4番目に古い大学で、Nassau Hallが最初の中心的な校舎、やがてこの校舎がOld Nassauと呼ばれるようになり、100年を超えた1859年にカレッジソングOld Nassau”がうたわれるようになりました。この歌が、はるか遠い日本の神戸の、創立まだ10年目の学校が校歌としたという理由は実はよくわかりません。南メソジスト監督教会とプリンストン大学のつながりも考えにくいのです。今もしこんなことがあると、著作権問題も生じていたことでしょう。

でも関西学院創立10年目の人々が“Old Kwansei”を校歌として原田の地に響かせたときの気持ちを想像してみると、そこにはまだまだ創立間もない小さな学校がやがてプリンストンのような研究と教育の先端を歩む学校として発展することへの希望や期待、そしてのちの後輩たちが関西学院にOldという言葉をつけてなつかしさを覚え、そこに自分たちの人生の大事な一歩が刻まれていくことを願ったのでは、と思えてくるのです。創立10年目の関学生たちには、115年後に自分たちの学院が七つのキャンパスを持ち、2万7千人の生徒、学生が集うようになるなどとは

想像もできなかったでしょう。では現在の私たちは創立10年目に学院で学んでいた先輩たちが、はるかな未来に、そして私たち後輩たちに託した大きな夢や希望というものを想像できるでしょうか。

創立125周年を今年迎えるとき、私たちも関西学院のキャンパスに歌声を響かせながら、古い先輩たちの大きな夢と希望、期待を受け止めたいと思います。

(宗教総主事)

「感謝」への「感性」

舟 木 讓

「人生の目標について考え、その目標に向かって真摯に努力する」という事はだれも否定できない生き方です。そして、その努力が大きいほど、満足感と充実感も増大します。また、目標に到達できずとも、それまでの経験が無駄にはならないことも事実です。しかしそうした前を向いた歩みの中で心に留めていなければならないこともあります。

125年前、本学はその創立にあたり、「関西学院憲法」を制定し目標を設定しました。その中に本学は「キリスト教の主義に拠って知徳兼備の教育を授ける」という一節があります。ここで「知徳兼備」と訳されている原文は「intellectual and religious culture」です。キリスト教という一つの宗教的理念をそのルーツに持て歩んでいる関西学院が、これまで何を大切にしてきたのかがここに集約されています。宗教的な営みが大切にしてきたものは、この世の存在の相対化といっても過言ではないでしょう。表面的な「事実」に安易にレッテルを貼ることを戒め、表面に表れない「真実」を追求し続ける姿勢こそが、学問にも人生にも不可欠なことでもあります。

中でも、今ここにある「私」がいかにか多くの人々や存在に支えられてあるかという端的な事実気づき、その事に感謝することができる「感性」を持ち続けたいとき、人は自らが神の位置に立ったかのような主客転倒した人生へと転落すると言えましょう。ここまでの歩みを支えられてきたことへの「感謝」から新たな一步を共に踏み出しましょう。

(大学宗教主事)